

軽度発達障害のある幼児の行動変容に関する実践的研究

— 幼児の行動に対する保育者の理解と支援との関連から —

(最終報告)

香川大学

松井 剛太

A Research of behavior modification of children with mild developmental disorders: Relevance between teacher's understandings and support for children's behavior

(A Final Report)

Kagawa University

MATSUI, Gota

要 約

本研究の目的は、軽度発達障害のある幼児の保育所での行動変容を保育者の理解と支援との関連から分析することを目的とする。対象児は広汎性発達障害の幼児2名である。フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）を使用して、幼児の行動に対する保育者のとらえ方の前後を調査し、保育者の行動のとらえ方と支援の変化と対象児の変化を分析した。その結果、FGIの使用により、保育者は幼児の行動に対するとらえ方が個体論的視点から関係論的視点に変わり、対象児に対する支援に関係性を取り入れるといった影響を与えることが示唆された。その変化は対象児の行動変容にも顕著に表れていた。

【キー・ワード】 軽度発達障害, 幼児, 行動変容, フォーカス・グループ・インタビュー

Abstract

A purpose of this study is aimed at analyzing behavior modification of children's with mild developmental disorders from relevance between teacher's understandings and support for children's behavior. Object children are two with pervasive developmental disorder. With focus group interview (FGI), I investigated front and back of teacher's understandings for children's behavior and analyzed change of support and a change of object children. As a result, teacher's understandings changes from a viewpoint of individual to a viewpoint of relations with environments by use of FGI, and support for a child change. It showed the behavior modification of an object child conspicuously.

【Key Words】 mild developmental disorders, children, behavior modification, focus group

interview

問題と目的

現在、LD、ADHD、アスペルガー症候群といったいわゆる軽度発達障害のある子どもへの支援は学校現場で喫緊の課題である。平成 14 年に文部科学省が調査研究会に委嘱して実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果により、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒が 6.3%いることが明らかになった（文部科学省、2003）。これ以降、軽度発達障害のある子どもが抱えている困難さへの認識が高まり、実践レベル、研究レベルで支援方法の検討がなされてきている。これまで軽度発達障害に関する多くの書物が出版され、軽度発達障害のある子どもの行動特徴が明らかにされてきている。主な行動特徴は、学習上の困難さ、対人関係の構築やコミュニケーションがうまくできないための社会性の困難さ、注意集中や行動・感情のコントロールに対する困難さである（本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島、2003）。これらの行動を個体論的視点と関係論的視点という 2 つの異なる視点からとらえるとその様相は変わってくる。個体論的視点では、子どもに素因としての障害があるために、顕在的障害の行動が生まれるとされる。一方、関係論的視点では、子どもに素因としての障害があったとしても、周囲の人的環境や物的環境との関係の中で生じた困難が行動として顕在化すると解釈される。すなわち、子どもの行動は、「素因である障害からの直接的な結果」としてとらえるのが、個体論的視点で、子どもの行動は、「素因である障害と周囲の環境を介した結果」としてとらえるのが、関係論的視点となる。

軽度発達障害の子どもに行う支援も、このような行動のとらえ方で変化する（鯨岡、2007）。例えば、軽度発達障害の子どもが行動が個体論的視点からとらえられた場合、軽度発達障害の子どもに対する指導上の困難は、障害があるから指導が困難であるとされる。それゆえ、個体論的視点からの支援は、子どもの障害特性を理解し、それに応じた対応となる。だが、軽度発達障害の子どもが行動が関係論的視点からとらえられた場合、現在行っている指導、学級風土、環境から軽度発達障害っぽい行動が起こっているとされる。つまり、関係論的視点からの支援は、子どもの問題行動が起こっている背景を理解し、それに応じた対応となる。

これまでの研究や出版物を見ると、障害別の対応マニュアルやパンフレットなど前者の支援に関するものが多かった。しかし、現在では、後者の関係論的視点からの支援についても検討されつつある。例えば、軽度発達障害の子どもを含めた学級経営の進め方や集団づくりのあり方が見直されてきている（河村、2005；橋本、2007）。この視点では、対象児と周囲の子どもとの関係で双方がどんなことで困っているか、教室の環境や学校風土は対象児にとって困ることを作り出していないか、といったことを検討し、座席位置、板書の仕方、掲示物などの環境設定を見直す。つまり、軽度発達障害のある子どもの課題を学級集団づくりによって解決するのが支援の基本となる。

本研究では、軽度発達障害のある幼児の行動に対する保育者のとらえ方と実際行っている支援との関連を検討する。そして、保育者のとらえ方の変化が軽度発達障害のある幼児の行動変容にどのような影響を及ぼすのか分析することを目的とする。

方 法

1. 対象

対象園は、広島県内のA保育園（在籍乳幼児，約 140 名；保育士，19 名）である。本研究の対象とした子どもは、広汎性発達障害の診断を受けているS児（4 歳）とY児（5 歳）である。S児の家族構成は父，母，本児である。S児はテレビ，ビデオが好きでアニメのキャラクターをよく覚えている。保育者は，S児は，「落ち着きがなく部屋にいることができない」，「笑顔なのに他児の顔を突然叩くことがある」といった行動を課題と考えていた。また，特に休日後に落ち着きがないことを気にかけていた。Y児の家族構成は父，母，姉，本児である。Y児は，ブロックや粘土が好きで一人遊びが多かった。こだわりが強く集団での活動が苦手であった。

2. フォーカス・グループ・インタビュー

本研究では，軽度発達障害の子どもの問題行動の背景を調査する手法としてフォーカス・グループ・インタビュー（Focus Group Interview；以下，FGI）を使用した。FGIはグループダイナミクス理論を背景とするグループ討議の手法であり，具体的な状況に即した特定のトピックについて質的な情報を把握できると評価されている（Vaughn, Schumm & Sinagub, 1996）。FGIはもともとマーケティングやビジネスの業界において，消費者の意識を質的にとらえるための調査手法として 30 年以上にわたって使用されてきた。しかし，近年，福祉・教育などのヒューマンサービスの分野においても，サービスの改善に向けた取り組みの中で数多く使用されており（細川，1999；丸山・安梅，2000），多様な分野で使用できる手法として認識されてきている。

FGIの討議は半構成的なインタビューの形式をとる。つまり，インタビュアーがあらかじめ用意しておいた質問項目を議論の流れの中で適時問い，それに参加者が答えていく。インタビュアーの手順としては，①導入，②FGIの目的の説明，③FGIの方法の説明，④具体的で答えやすい質問で開始，⑤グループダイナミクスが起りやすいように道案内としての役割，⑥次への発展につながるように要約，である（高山・安梅，1998）。こうした手順に沿って実施された議論の内容をビデオやテープに録音し，分析する。FGIにおける分析は基本的に議論の中で重要と思われる発言内容を「重要アイテム」としてできるだけ抽出し，その「重要アイテム」を類似した内容ごとに「重要カテゴリー」に分類する方法で行われる。こうして分類された「重要カテゴリー」が議論の主題となり，「重要アイテム」がその内容となる。そうした過程を経て，分析者が参加者の意見を集約的にまとめ，目的に応じて記録する（安梅，2001）。

保育者が複数の事例を出し合うことによって，さまざまな保育場面における対象児の課題から，問題行動の背景を把握し，その後の保育の改善に活かすこととした。

3. 手順

本研究では，まず保育者が対象児の行動をどのように認識しているか，そして，どのような対応をしているか，を個別インタビューにて調査する（事前調査）。その後，FGIを用いて対象児の行動の

背景について分析する。そして、その結果保育者の対応がどのように変化し、どのように対象児が変わったかを明らかにする（事後調査）。

結 果

1. S児の事例

(1) 事前調査 — S児の行動と保育者の認識—

S児は登園してまず別のクラスに行き、テレビを見るという行動をしていた。保育者は、そこから自分のクラスに戻ろうとしないことに保育のしづらさを感じると述べた。また、S児は集団活動から離れて一人で違う遊びをすることが多かった。担任は、集団活動に加わらないことについて、集団活動が発表会の行事の練習だったため、いつもより無理強いして集団に加えようとしたことによるストレスが原因であるとの見方を示した。また、他児の顔を叩く場面も同様にストレスが原因であると認識していた。

(2) 事前調査 — 保育者の対応—

担任は、S児が朝のルーティーン（ノートに登園のハンコを押す）を守ることを徹底するため、絵カードを使用した支援を行っていた。まず、S児が登園後に「テレビを見たい」と要求した場合、担任がテレビの絵カードをS児に渡して移動させるようにした。そして、移動したクラス（黄組）の先生がそれを受け取り、10分間テレビを見せた後ノートの絵カードを渡す、それを持ったS児が自分のクラスに戻り、担任と一緒にノートにハンコを押すという手順である。また、集団から離れたときには、無理に注意せず、落ち着くまで一緒にいるという対応であった。

(3) 事後調査 — FGI の分析と保育者の認識—

担当保育者だけでなく、園内の保育者 10 数名とともに、FGI を使用した調査を実施した。調査の様子はすべてビデオで撮影し、その記録をもとに分析を行った。分析の結果は図 1 に示す。

調査の結果、「大集団だと落ち着かない」、「先生への独占欲、意識の高さ」が重要カテゴリーとして抽出された。絵カードの使用については、カードなしでも朝のルーティーンができたことが明らかになった。先生への独占欲が強いことについては、先生との個別の関わりにおいては問題ないものの、集団活動において他児とのトラブルの要因となりかねないことが懸念された。その後の方針として、絵カードの使用は継続するが、①保育者とのコミュニケーションを中心に朝のルーティーンを行うこと、②集団活動の時間では、一人のスペースをつくってまず集団と同じ活動が出来るように支援し、徐々に集団活動に加えていく方向性が共通に理解された。

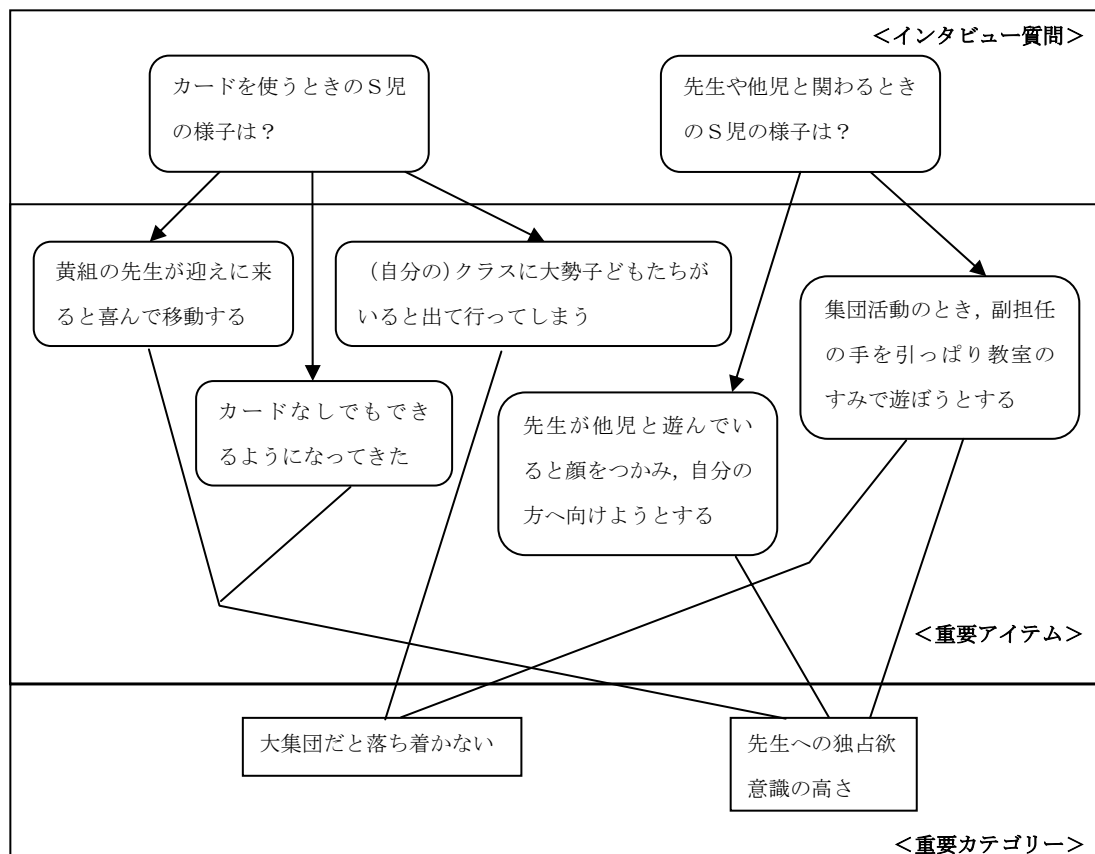


図1 FGIの結果（S児）

(4) 事後調査 ー保育者の対応ー

朝のルーティーンを保育者とのコミュニケーションを中心に行うことで、絵カードの役割が変わったようであった。すなわち、それまで絵カードの使用は、S児が登園してノートにハンコを押すというA保育園のルーティーンを守るために行うことが目的であったが、S児と担任保育者とのコミュニケーションの機会を増やすために用いるようになった。これは、担任保育者が絵カードを用いてS児と関わる機会を増やすことによって、S児の関心を黄組の保育者から担任保育者へと移行させ、その結果として、S児が担任保育者の関心を引くために自分のクラスでのルーティーンや設定保育に参加するのではないかという仮説にもとづいている。その後のFGIで、S児のルーティーンが定着し、保育園での生活全般に落ち着きが見られるようになったとの報告がみられた。また、集団活動にすべての時間加わることはできないが、部分的に参加するようになった。他児とのトラブルはほとんどなくなったが、一緒に遊ぶには至っていないことが報告された。つまり、担任保育者とS児との関係改善がS児の問題行動の軽減に繋がったことが示唆された。S児の変化は以下の図2に示す。

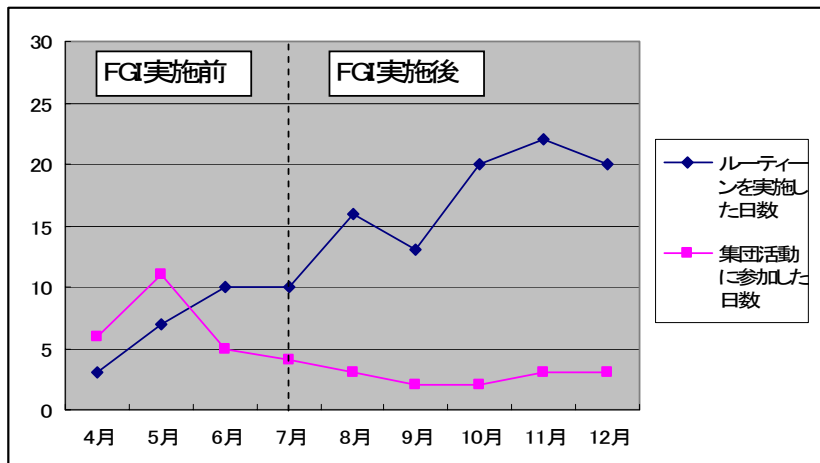


図2 S児の変化

2. Y児の事例

(1) 事前調査 —Y児の行動と保育者の認識—

担任は、Y児から「保育者の指示に対して明確な答えが返らない」ことを気にしていた。観察では、Y児が保育者の指示に対して他児から少し遅れて反応する様子や独語のようにつぶやいて答えることがあった。それに対して、保育者はクラス全体の動きを統率するため、Y児の反応を待ちきれないことがあった。つまり、Y児が指示を理解するのに少し時間がかかることや意思表示が他児に比べて見えづらいことだけではなく、保育者の支援の仕方とも関係して、保育者の「気になる」状況が生じていると考えられた。保育者への聞きとりからは、Y児に保育全体の見通しを持たせるため、保育者が付き添い、声かけをしたいとのことだった。そこで、どのような指示の仕方がY児の反応を促すのか、またそれはどのような反応であったか、前後の文脈を含めて記録することになった。

(2) 事前調査 —保育者の対応—

担任の指示に対してY児がどのような反応をするのかを記録するように伝えたことで、Y児が反応を示すまで待ったり、少し距離を置いてY児の様子を見守ったりする担任の様子が観察された。筆者の観察では、Y児が発表会で踊るダンスの練習において、隣にいる男児を見ながら自身のダンスを修正していく様子や縄跳びの練習において、自分の影を見ながら練習を繰り返して縄の回し方がうまくなっていく様子が見られた。このことから、担任がY児に指示する方法とY児が自分で学習する方法の相違が「気になる」行動を誘発していることが示唆された。

この観察結果を踏まえて、FGIを実施した。

(3) 事後調査 —FGIの分析と保育者の認識—

FGIで実践の結果を話し合った。筆者がインタビューと書記を務め、参加した保育者に対して質問をした。質問は「最近のY児の様子で気づいたことは？」である。この質問に対して、担任だけで

なく、他のクラスの先生からもY児に関連するエピソードが出された。出されたエピソードは、筆者がすべてホワイトボードに書き出し、その場で保育者の話を聞きながら、FGIの手順に沿ってまとめた。分析結果は以下の図3に示す。

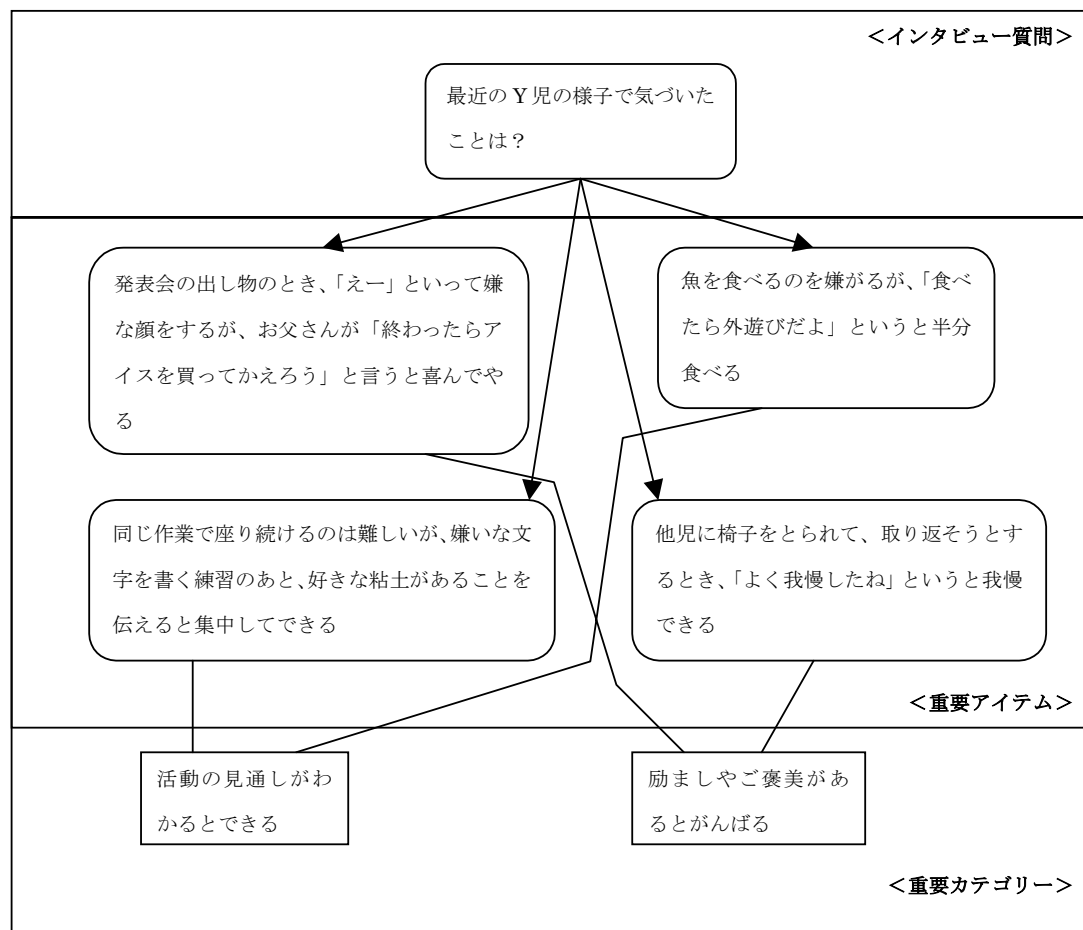


図3 FGIの結果（Y児）

分析の結果、Y児の様子として、「活動の見通しがわかるとできる」、「励ましやご褒美があるとがんばる」という重要カテゴリーが抽出された。さらに、議論はどのような「見通しの持たせ方」があるかに移行し、①基本的に全職員がアイコンタクトをしっかりと伝えて伝えること、②職員がいないときなど、状況によって補完的な役割を果たすものとして、Y児の所属する教室に一日のスケジュールを絵と文字で示し、時計を表示したものを掲示することが決まった。これは、就学に向けてY児に限らずすべての子どもが時間割に慣れることも意図した取り組みとして提案された。

(4) 事後調査 —保育者の対応—

保育園の全職員が、Y児と関わりを持つとき、常にアイコンタクトを意識するようにした。また、一日のスケジュールを掲示し、適宜Y児に次の活動を知らせるようにした。その結果、その後のFGIにおいて、『Y児がスケジュールを指さしながら「次は片付けでしょ」と保育者に伝える』などが報告され、Y児が保育園において、見通しを持って生活していく様子が報告された。その結果、保育者も余裕を持ってY児と関わるようになっていた。

考 察

S児とY児の事例から、FGIを実施する前後において、子どもの行動に対する保育者の見方が個体的視座から関係論的視座に変化し、子どもとの関わりにも変化が見られた。しかし、対象児の変化には相違があった。それは、S児が集団活動に参加しなくなる(図2)というように、A保育園の日課とは異なる行動を示したことに對して、Y児はA保育園の日課に沿って生活するようになったことである。これは、関係論的視点からの保育者の関わりに、保育者とS児の二者間の関わりであった場合とすべての保育者とY児という多者間の関わりであったことと関連していると思われる。

牧野(2004)は、関係論的視座から障害児者への支援について示した研究を概観し、広義の関係論的視点と狭義の関係論的視点を提示している。それによれば、S児の事例に見られるような二者関係で捉えるものは狭義、Y児の事例に見られるような多者関係で捉えるものは広義となる。狭義の関係論的視点からの研究では、鯨岡・鯨岡(1989)が乳児と母親との間で起こる発達の変容について詳細に分析している。このように、子どもと養育者の二者間におけるコミュニケーションを枠組みとして、コミュニケーションの送り手と受け手との関係から支援を行うことは、コミュニケーション障害の支援に有益な視座を与えている(牧野, 2004)。一方で、保育所・幼稚園のように多様な環境要因が複雑に影響し合う状況においては、必ずしもコミュニケーションの送り手と受け手という関係からでは成立しない状況が生じる。大石(1993)は保育園における障害児と保育士の関わりを対象としてコミュニケーション障害の構造を検討している。その結果、コミュニケーション障害は、両者を取り巻く複雑な環境要因によって引き起こされるものであり、その改善には関わり手の内面操作が必要であることを指摘している。すなわち、あらゆる状況を考慮した中での関わり手自身の内面の見つめ直しが重要となるのである(青山, 1997)。

本稿の事例では、FGIを用いることで複数の保育者の視点から保育園の状況に即して、対象児の行動を検討した。このような複数の保育者の話し合いは、保育の見つめ直しに寄与することが報告されており(田代, 1996)、FGIの実施から保育者が自身の保育を内省したことが推察される。しかし、S児の事例の場合、保育者の内省から導き出された支援の方法は、担任保育者とS児との二者関係に特化したものであった。

その結果、S児に対する絵カードの使用目的の変化に伴い、S児と担任保育者との関係性が構築されたために、S児が登園後、黄組のクラスに行くことなく自分のクラスの担任保育者と一緒にルーティーンをするようになった。その一方で、集団活動への参加は、S児と担任保育者の二者間の関係性

が構築されたことが返って悪影響を及ぼしたと考えられる。すなわち、S児は設定保育の時間においても、他児から担任保育者を独占するために1対1での関わりを求めようになり、設定保育が進まない状況になった。そのため、担任保育者もS児の求める関わりに対応せざるを得なくなり、設定保育から離れてS児と二人でいる時間が多くなったのである。つまり、二者関係の深まりが保育園の状況においては必ずしも効果的ではないということが示唆された。

本稿では、2人の軽度発達障害の子どもの事例から、広義の関係論的視点からの支援が集団活動への参加を促すということが示唆された。いずれの視点における支援が効果的であるかは、様々な要因により変わるものであろう。しかし、幼児期の子どもは、軽度発達障害に見られる行動が発達の過程や保育者の指導性によって表れる場合も少なくない。とりわけ軽度発達障害から引き起こされる行動は、保育園の多様な要因によって顕在化する場合が多いため、保育者が自身の保育を見つめ直し、支援の方法においても、広義の関係論的視点から多様な要因を考慮する必要があると考えられる。

引用文献

- 安梅勅江 (2001) ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開。医歯薬出版株式会社。
- 青山新吾 (1997) 通級指導教室における関係への援助について。日本特殊教育学会第35回大会発表論文集, 386-387.
- 橋本創一 (2007) 特別支援教育の実践にあたって心がけたいこと。児童心理, 858, 52-58.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査。発達障害研究, 25(1), 50-61.
- 細川えみ子 (1999) グループインタビューによるニーズ把握—住民の本音を聞く方法。保健婦雑誌, 55(10), 823-828.
- 河村茂雄 (2005) 学級担任の特別支援教育—個別支援と一斉指導を一体化する学級経営—。図書文化社。
- 鯨岡峻 (編訳)・鯨岡和子 (訳) (1989) 母と子のあいだ—初期コミュニケーションの発達—。ミネルヴァ書房。
- 鯨岡峻 (2007) 発達障害ブームは「発達障害」の理解を促したか。そだちの科学, 8, 17-22.
- 牧野泰美 (2004) 関係論的視座からのコミュニケーション障害研究の動向。特殊教育学研究, 42(1), 75-81.
- 丸山昭子・安梅勅江 (2000) 夜間保育サービスの今後の課題に関する研究—施設長・保育専門職のグループインタビューを通して—。日本保健福祉学会誌, 7(1), 41-47.
- 文部科学省 (2003) 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査 調査結果」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301i.htm
- 大石益男 (1993) コミュニケーション障害の構造と本質に関する考察—関わる側の内省報告からの検

討一. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 20, 113-120.

高山忠雄・安梅勅江 (1998) グループインタビュー法の理論と実際. 川島書店.

田代和美 (1996) 保育カンファレンスの検討—第2部 研究者の立場から考える—. 保育学研究, 34(1), 34-42.

Vaughn, S & Schumm, J, S, & Sinagub, J. (1996) Focus Group Interviews In Education and Psychology. SAGE Publication.

謝 辞

本研究の実施にあたり, ご協力いただいたA保育園の先生方やS児, Y児とご家族に深謝いたします。